

研究の黒子の本音：プロポーザル評価、研究評価、論文査読の現場から

富山哲男

Professor, Life Cycle Engineering,
Cranfield University



はじめに

JSPS から最初に講演依頼があったとき

は、EPSRC のパネル審査員を経験しているからパネル審査の内情を説明してほしい、と言われたんですが、守秘義務がありますからあまり詳しい話もできませんので、今日はもう少し一般論として、いつも考えていることがありますので、お話ししたいと思います。

私自身は、東大にドクターまでいまして、オランダでポスドクを2年やって、東大に戻って15年、その後オランダのデルフト工科大学に10年いました。2012年にクランフィールド大学に来ました。（アドバイスですが、こういうことはしないほうがいいです。なぜかと言うと、年金がめちゃくちゃになります。たまさかですが、基礎年金は日本とイギリスで通算できて、オランダと日本でも通算できるので、それで何とかカバーできるのかなど。あとは上乘せ分ですが、3カ国にいて一番割りが合わないのは日本かな、という気がします。）

今日は、研究者そのものというよりは、雑誌の Editor や Editorial Board のメンバー、会議の Chair や Programme Committee のメンバー、Funding Agency のパネルやレビューワー、それからプロモーションやリクルートのときの紹介状、レファレンス・レター（これはイギリスもかなり真剣に見ますが、アメリカは非常に厳しく見ます）、External Examiner、そういった私の経験からお話ししたいと思います。

External Examiner は、いわゆる論文審査で普通は他大学の論文の審査をするのですが、イギリスに来てびっくりしているのは、教育プログラムの External Examiner をやらされる。これが大変でひーひー言っています。

研究の黒子の苦勞

審査や評価というのは、一言で言うと「鏡よ、鏡よ、鏡さん」なんですね。皆さんは鏡の前で「俺はこんなすごい発見をした」とか「こういういいペーパーを書いた」

というような自慢をしているわけです。鏡の裏では、それを見ている人がちゃんとして、審査をちゃんとやるわけです。ある意味で卑劣なのは、審査者は匿名なので、まさに鏡、マジックミラーで、裏側で誰が審査しているかは見えない。雑誌によってはダブル・アノニミティで、査読者が読むときも著者の名前が消されている、著者も査読者が誰かわからない、という方法でやっているところもあります。でも、査読者に著者がわからない、というのは嘘です。普通、論文を書くときは、自分の書いた論文がレファレンスに並びますよね。だから、査読者は、レファレンスを見れば、その論文を誰が書いたか、少なくともどのグループに所属する人が書いたかはわかります。最近査読者に渡すときにはレファレンスも消す、というところもありますが、消すとかえってわかっちゃうんですね。というわけで「鏡よ、鏡よ、鏡さん」なんです。

今日は、なぜ裏側の黒子の話をするかというと、我々が研究をしてペーパーを書く、あるいはプロポーザルを書くと、それをレビューする人が必要になります。レビューを通して初めてアクセプトとなるわけですが、実は、今どういう状況になっているかというと、論文をたくさん書いたほうが勝ち、というシステムになってしまっています。その結果、どこの大学でも、大学院生のころから、どういうふうに論文を書けばいいか、どういうプロポーザルを書けばいいかを手とり足とり教えて、論文やプロポーザルを書く側の生産性がものすごく高くなっているのに、その審査をするレビューワーが追いつかない、という状況になっています。追いつかないというのは、単にレビューワーが足りないというだけではなくて、そもそもレビューワーが見つかりません。レビューを頼んでもみんな断ってきます。今は電子編集システムになっているので、断るのはすごく簡単になっています。昔は、断るのにも手紙を書かないといけなかったんですが、今はクリックひとつで簡単に断ることができます。「忙しい」の一言でみんな断ってきます。とにかくレビューワーを見つけるのが大変です。レビューワーが見つかって、引き受けてくれても、時間通りにやってくれない。返ってくるレビューもめっちゃくちゃ。皆さんもご経験があると思いますが、何の役にも立たないレビューが多いわけです。チェックボックスに記入はあるけれど、コメントとしては「結論が弱いからもう少し書き直せ」という程度しか書いてない。エディターから見たら、これはダメ、これはOKだから通す、という判断に使えるからそれでいいんですが、著者から見たら何の役にも立たないレビューなわけです。そんなレビューだったら、そもそもやっても意味がない、という話になっているわけです。ですから、

今、いわゆるピア・レビュー・システムが死にかけているんです。特にカンファレンスは最低な状態です。今、イギリスでは REF がありますが、REF ではカンファレンス・ペーパーは評価の対象に入らないので、みんなカンファレンス・ペーパーを書かないわけです。以前は、カンファレンスというのが大事で、カンファレンスで皆さんの前で発表してフィードバックをいただく、というのが大学院生の典型的な教育指導スタイルだったんですが、今は、カンファレンスに書いて出しても、役に立たないから、カンファレンスには出さない、結果としてカンファレンスにペーパーが集まらない。カンファレンスが死んでいっている、そんな状況が、少なくとも私の近くでは起きつつあります。

そんな状況なので、皆さんにお願いしたいのは、レビューを頼まれたら、ぜひ受けてください。若干、専門から離れていても、受けてください。ただし、一番大事なことは、本当に期限内に書けるという自信があるときだけ、引き受けるようにしてください。そうでなければ、レビューを頼む側としては、次のレビューワーを探しにいかないといけません。一番困るのは、引き受けてくれたのに期限までに書いてくれないレビューワーです。特にカンファレンスは開催日程が決まっているので、何月何日までに採否を決めないといけない。それに間に合わないレビューをされても困るわけです。ですから、できないならできないと、すぐに言うべきです。できないとすぐに言うのは、返事をしないまま放っておく、あるいは引き受けておいてやらない、というのよりも百倍ましです。

雑誌のペーパーのレビューでは、ひどい雑誌だと、あらかじめ断られることを念頭において、最初から 6 人ぐらいにレビューを依頼します。全員から返事がなくても、6 人に頼めば半分の 3 人ぐらいからは回答が来るから、それで 3 人は確保できる、そんなことをやっている雑誌もあります。カンファレンスの場合は、あまりに数が多いから、そういうことをやっているレビューの数が膨大になるので、2~3 人に頭を下げて、レビューをやってもらいます。リサーチ・カウンシルのプロポーザルだと、だいたい 4~8 人ぐらいに見てもらいます。プロポーザルを書く側がレビューワーとして 3~4 人の知り合いの研究者の名前を挙げて、リサーチ・カウンシル側が 3~4 人の外部のレビューワーを挙げて、レビューを依頼するわけです。プロモーションやリクルートのレファレンス・レターの場合は、応募する側が最低 3 人ぐらい名前を挙げて、あと 2~3 人は大学側で探す、ということが多いです。

こうやってレビューワーの人数をあげてみましたが、我々から見て一番困るのは、レビューにこれだけの人の手間をかけている、ということをお皆さんが理解していない、ということです。つまり、1回論文を書いたら、3倍の人がレビューをやる、しかも2回、3回とループするわけです。レビューにものすごく手間がかかっている。もちろん研究そのものが一番手間がかかるわけですが、それにも増して、査読する方もそれなりに手間をかけている。そこも考えてあまり論文の量産はするな、と言いたいですね。私、以前に、フェア・トレードではないですが「フェア論文制度」というのを作ったらどうか、とエルゼビアに提案したことがあるんですが、彼らは出版すればするほど儲かる仕組みになっているので、そっぽを向かれました。冗談ではなくて、そういう状態になっているんです。

それに、レビューのクオリティーそのものが、まちまちなので、これを揃えるのが大変なんです。マルチプル・クエスチョンになっていて「タイトルはどうですか」「アブストラクトはどうですか」と項目が並んでいるものはレビューも簡単なんです、そういうレビューは粗すぎて、あまり役に立たない。エディターからすると、そういうのは一番ラクなんです。読まなくていいし、結論だけ見て、「はい、OK」「はい、ダメ」とやればいい。でも、著者にとっては役に立ちません。いい加減なレビューというのは、世の中にいっぱいあるんです。それから、Conflict of Interestの問題もあります。普通は、Conflict of Interestがある場合は申告してください、となっていて、ポジティブなConflict of Interestはみんな正直に言うわけですね。この著者は昔、私の研究グループにいたのでレビューはできません、というように。ただ、中には、ネガティブな悪口を書くために、意地悪をするためにConflict of Interestを隠して否定的なレビューをする人がいます。これには気をつけないといけません。

そもそも、我々はレビューの書き方をどこかで教わったか、あるいは勉強したか、というと、自分も含めて、何もやっていないわけですね。でも、これを真面目にやらないとピア・レビューというシステムそのものが成り立たなくなります。ピア・レビューがいいかどうか、という議論もありますが、そういうことも含めて、ピア・レビューというシステムそのものの存亡に関わる話です。真剣に考えないといけない話だと、私は思います。

もうひとつ気にくわないのは、出版ということを見ると、レビューワーはタダで査読している、もちろん著者もタダで書いている、エディターも基本的にはタダで

す。雑誌によっては報酬を払ってくれる場合もあるがスズメの涙であって、それで生活はできません。ところが、Publisher（出版社）や、一番けったくそ悪いのは Publisher の上にさらに乗っかっている Web of Science や Scopus のような論文データベースを作っているところですが、彼らが一番、儲かっている。商業的にやっけて、儲かっているわけです。

これが変わる可能性があります。皆さんが論文を書いて、レビューワーが3人で、一人のレビューワーが論文を読んでレビューを書くのに4時間かかり、レビューを2サイクルやるとします。そうすると単純に計算して全部で24時間かかります。これはかなり膨大な時間ですよ。これでアクセプトされればいいんですが、これで落ちてしまうと、レビューにかけていた時間はなんだったんだ、ということになる。レビューをやれば、それをひとつの業績として考えよう、という話はないわけではない。

ジャーナルのエディターとして

私が昔エディターをやっていたジャーナルの場合は、だいたい送られてきたペーパーの75%ぐらいを落としていました。50%はレビューワーまで行かずに、エディターである私が落としていました。エディターにとって落とすかどうかの判断は、ある程度やっているとコツがつかめて簡単です。一番大事なのは結局は Scope なんです。Scope がそのジャーナルに合っていないければ、残念ながらそこで終わりです。Engineering の場合は Application があるか、Validation をちゃんとやっているか、についてもチャプターを見ればすぐにわかるので、5分で判断がつく。それから長さも重要で、アーカイバル・ジャーナルである以上、あまりに短いものはご遠慮願いたいわけです。論文を投稿する側の皆さんに言いたいのは、ここの段階、エディターが見る段階で落とされてはいけない、ということです。ここを通れば、あとはレビューワーとの戦いなので、雑誌によって違うけれども、結構、通ります。最初のエディターのところを通らないと話になりません。

エディターとしては、こうやって長い時間をかけてそのジャーナルのインパクト・ファクターが上がってきます。そうすると、最初のころに落ちた人達は来ないんですが、別のところから新しい人達が投稿してくるようになります。なので、いつまでたっても、リジェクト率が75%という数字は不動で変わらないです。

ジャーナルの最近のいろいろな傾向についてもお話したいと思います。最近では Web of Science が非常に力を持ちすぎて、新しいジャーナルをスタートできなくなっています。どういうことかということ、インパクト・ファクターが付いてない新しいジャーナルには誰も投稿しなくなっているのです、新しいジャーナルを立ち上げられない、つまり新しい分野をスタートできない、ということです。先ほど申し上げたようにカンファレンスはマージナライズされてしまって誰も来ようとしません。その結果、カンファレンスそのものも、何でもいいから出してくれ、となると、結局、大学院生の学芸会みたいになってしまう。

それから、Plagiarism Detection（盗用の検出）というのは非常に精緻化されていて、iThenticate や CrossRef というのがありますが、これでチェックすると、ほとんどのペーパーは参考文献のせいで similarity factor は絶対にゼロにはならない。レファレンスはみんな共通ですから。昔は、カンファレンス・ペーパーを書いて、それをアップ・グレードしてジャーナルに出す、というのが常識だったのですが、今、これが相当付け加えるか書き直さないとダメになりつつあります。分野やジャーナルによっては、明確にダメと言っているところもあります。これは非常に困るわけです。

また、インパクト・ファクターをあげようとして、セルフ・サイテーション、特にジャーナル・サイテーションと言われるものですが、雑誌によっては「うちの雑誌の論文を引用しろ」ということをレビューのコメントの最後にちらっと書いてきます。これをやりすぎて、Web of Science から落とされたジャーナルもあるぐらいです。で、これも頭の痛い話です。

そして、オープン・アクセスというのがほとんどのファンディング・エージェンシーから求められています。オープン・アクセスは、結局、著者がお金を払わないといけない。

昇進、テニユア、採用のレファレンス・レター

こういうレファレンス・レターは、人によっては、ライフ・チェンジングなものですから、あまり下手なことは書かない方がいいと思います。私が知っている例で、ネガティブなことを書いて「ざまあ見ろ」とやったら、次に自分に戻ってきた人もいますから。レファレンス・レターを書けないのだったら、書くとは言わない方がいいです。国によっては情報公開請求もありますから、万が一、不利益な決定をこうむった

人が、大学に情報公開請求をすると、このレビューを書いた人はこの人ですよ、と裁判所から来てしまうことがある。ですから、不利益なことを書くときは、よほど覚悟して書かないといけません。

良いレビューとは

最後に、良いレビューとはどんなものか。主にジャーナルのレビューですが、まず手短かに書きましょう。20 ページの論文に 20 ページのレビューを書くような、ひまな大学院生も時々いますが、これはレビューの意味がありません。レビューワーは著者でもなく、エディターでもありません。レビューワーは、著者に代わって書いてあげるのが仕事ではありません。日本語で言えば「てにをは」、英語で言えばタイポや文法ミスにやたらとうるさい人がいますが、論文タイトルのミス以外はそのままでいいと思います。タイトルは、著者本人が気づかないことが多いので、タイトルのミスは言ってあげた方がいいです。

エディターにとって有意義なレビューと、著者にとって有意義なレビューは違います。そこを勘案してレビューを書くのが良いでしょう。大事なことは、期限前に、正直かつ手短かに、公正に、レビューのコメントを書くことです。あまりに抽象的なコメントは著者にとっては意味がなく、何をすればいいのか、何がいいのか、何が悪いのか、を指摘してあげるのが大事です。それから、ポジティブなフィードバックも含めましょう。悪い点ばかり指摘すると、著者もめげてしまいますから、「ここはいいけれど、ここを強化しなさい」というような書き方をすると良いと思います。

というところで、終わりにしたいと思います。ありがとうございました。